

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イタリア語における否定表現 〈特集 否定表現について〉
Author(s)	古浦, 敏生
Citation	広大言語 , 5 : 6 - 9
Issue Date	1965-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046218
Right	
Relation	



イタリア語における否定表現

古 浦 敏 生

§ 1. はじめに

今回の「広大言語」は、否定表現の特集号らしいので、何か書かねばなるまいと思い、日頃サボっているイタリア語（以下 *ital.* で示す）研究のつぐないのために、主として、G. Rohlfs: *Historische Grammatik der italienischen Sprache, Band III, Bern, 1954* を参考にしながら、ペンを執つた。

§ 2. 否定詞の形態

ラテン語（以下 *lat.* で示す）の否定詞 *non* は、そのまま、*ital.* でも *non* として受継がれている。このほか、*ital.* の否定詞には、*nessuno* (<*lat. ne ipse unus*) 「誰も……ない」；*niente*（語源不明），*nulla* (<*lat. nulla*) 「何も……ない」；*né … né …* (<*lat. nec … nec …*) 「…でもなく …でもない」；さらに、*né* に強めの副詞 *anche, meno, pure* が付いた *neanche, nemmeno, neppure* 「…すら…ない」；等がある。また、*non* が強調されて語末の *-n* が落ちてできた *no* 「いいえ」がある。

ここでは、これらの否定詞すべてをくわしく説明するわけにはいかないので、*non* だけをとりあげてみよう。

non の *-n* は、次の子音と *assimilation* を起す場合がある。eg. *No lo senti.* (<*Non lo senti.*) 「君は、それを聞かない」。また、この *-n* は、母音で始まる語の前では長くなる場合がある。eg. *Questa nonn'è terra da conquistare.* 「これは、征服すべき土地ではない」。

また、*non* は、地方によつてやゝ異つている。eg. トスカナ方言（フィレンツェ付近）では *nun.*（この *nun* が短縮された）*un*；エミリア方言（ボローニャ付近）では *en, ne, n*；リグリア方言（ジェノバ付近）では *nu*；ベネト方言（ベネツィア付近）では *no*；南部方言（ナポリ、

カラブリア、シチリア) では *nun, nu, n', nna, un, u, etc.* ; となつている。

§ 3. 否定詞の用法

ここでは、いわゆる虚辞否定だけをとりあつかうことにしよう。

lat. の恐れ^のの表現の後に続く副文章では、その恐しいことが生じなければよいがという希望から、否定詞の *ne* が使われることは衆知の事実である。これと同じ現象は、古代 ital. (時代を正確に決めることはできないが、ダンテ、ペトラルカ、ボツカチオ等が生存していた頃だと考えればよからう) にも見られる。eg. *Temo che i Parenti suoi non la diano ad un altro.* 「私は、彼女の両親が彼女をほかの男に与えねばよいかと恐れている」。即ち、*temo* という恐れ^のの表現の後に続く (接続詞 *che* 以下の) 副文章では、否定詞の *non* が現れている。

このような現象は、*dubitare* 「疑う」 *guardarsi* 「用心する」、*impedire* 「妨げる」、*negare* 「否定する」、*vietare* 「禁じる」等の後でも見られる。

現代 ital. では、この現象は必ずしも厳密であるとは云いきれない。即ち、上述の動詞の後に続く副文章では、*non* は、現れたり消えたりする。この所は、もう少し追究してみる必要がある。

§ 4. Füllwörter

否定を強調するために、いわゆる Füllwörter (以下 F. で示す) が役立っている。F とはフランス語 (以下 fr. で示す) における *ne... Pas* の *Pas* の如きものを云う。この F の発生であるが、恐らく eg. *Ich esse nicht eine Krume.* 「私はパンくず一つ食べない」のような文章がもとになつて、この *eine Krume* に相当する語が一般化され、ほかの動詞にも付けられるようになったことに依るのである。

すでに古代 ital. においても、F は存在していた。eg. *Punto* (元来「点」の意) ; *mica* (又は *miga*) (元来「粉くず」の意) ; さらに、まれではあるが、*fiore* (元来「花」の意) , *guado* (元来「浅瀬」の意) etc. ここで文章の例も挙げておくと、eg. *Non dubito Punto.* 「私は一寸も疑っていない」。けれども、これらは、否定を強める目的にのみ用いられたのであつて、現代 fr の *Pas* とは異つている。

これに対して、現代 ital. の F は、常に強めの意味を持つてゐるわけではない。eg. *Non sto Punto bene.* 「私は身体の具合がよくない」。また、現代 ital. 諸方言では、上述

の古代ital.のFのほかに、*foglia* (元来「葉」の意) . *goccia* (元来「滴」の意) ,
brisa (元来「パンくず」の意) もFとして役立つている。さらにピエモンテ方言 (トリノ付近)
では、frのPas がPaとして入りこんでいる。このほか、否定詞とFとが一語になつた例もあ
る。eg. ピエモンテ方言 *nutta* (<non+gutta「滴」)。

§ 5. Füllwörterの用法

古代ital.の例からわかるように、Fは、もともと、否定詞を強めるものであつた。けれども、
それが使い古されてくると、強めの意味が薄れ、単なる飾りにすぎなくなつた。しかし、おもしろ
いことに、逆の現象も存在する。即ち、Fに否定詞の概念が移行し、ついに、Fだけで否定表現が
行われる現象もある。現代fr民衆語では、*pas* が *ne* を追いやつて、eg. *Il vient pas* .
「彼は来ない」という表現ができた。これと同じ現象が北イタリアにも起つている。eg. ロンバ
ルディア方言 (ミラノ付近) の *CaPissi miga* . 「私はわからない」。さらに、エミリア方言で
は、動詞の不定法の否定にもFが役立つている。eg. *brisa rubar* 「ぬすまないこと」。

§ 6. おわりに

くだらないことをゴタゴタ述べたが、最後に、今後追究すればおもしろかろうと思われるテーマ
(§ 3.で述べたものは除いて) について一寸ふれておきたい。

私は、否定詞自体よりも、Fに興味を覚えた。つまり、「どんな語がFになりうるか?」という
疑問が生じた。§ 4.からわかるように、Fとしては、「点」、「粉くず」、「滴」などのような具
体的な名詞が、しかも、「小さなもの (最小単位)」、「つまらないもの」という概念を持つ語が
現れやすいようである。これは『「小さなもの」を否定しておきさえすれば、「大きなもの」、「
普通のもの」はもちろん否定できる』という意識、具体的に云うと、『eg「一步も歩けない」と
いう文章において、「一步」という「小さなもの」を否定しておけば、「十歩」という「大きなも
の」はもちろん否定できる』という意識、を利用して否定を強調しているのであろう。

しかし、(§ 4.で現われた)「花」、「葉」、「浅瀬」は如何にしてFになつたのであろうか?
上述の説では解明できそうもない。例をあげてみよう。eg. *Ne Dio guarda fiore* . 「神
は一寸も見つめない」 (<「神は花を見つめない」)。但し、これはGuittone という人の詩
における例なので、韻の関係で、*fiore* を使つたのかもしれない。けれども、「葉」、「浅瀬」
は(詩ではなく)フィレンツェの俗語でFとして用いられているので、「韻の関係であろう」とし
てすまずわけにはいかない。

ここで結論が出せないのは残念であるが、どのように追究すればよいか、その方法だけでも考えてみよう。

(1) イタリア語に限らず、もつと広く、**F**の例を集めて整理してみる。

(2) 上述の **fiore** 「花」、**foglia** 「葉」、**guado** 「浅瀬」 etc. の語を、それぞれ語源にさかのぼり、それらの意味変化の歴史を調べてみる。

諸者諸氏の御意見を賜りたい。

mhd の 否 定 表 現 (その1)

- ne (en) について -

岡 崎 忠 弘

ドイツ語史に於ける否定表現の型を簡単に示せば：

ahd. (750~1100) mhd (1100~1500) nhd. (1500~)

ni mac ne (en) mac niht mag nicht

となる。

mhd. では一般に本来の否定詞 **ne (en)** と否定補足語 **niht** とで否定は表示されるが、この両者の力関係を観察してゆくことが、この小論の目的である。他の諸言語に於けると同様にドイツ語にあつても、本来の否定詞 **ne (en)** は否定の補足語 **niht** と共存ののち、客分たる **niht** に駆逐され衰退への道を辿っている。Der Nibelunge Not (推定成立 1200 年頃) に於いては、或る時は **ne (en)** が、或る時は **niht** が脱落していて、必ずしも **ne (en) - niht** の原則型で否定が表わされていない〔(注) niht の脱落の可能又は必要な場合：①他の否定代名詞、否定副詞が存する時、**niht** は **ne (en)** とは併用されるが、これ以外の否定を表わす語とは併用されない。① **daheim**, **lekein**, **kein**, **deweder** を含む文に於いて② „weiter“ „etwas weiters“ の意の **ander**, **anders**, **meRe**, **baz**, **fur baz** を含む文に於いて。 usw. ne (en) の脱落の場合：① **en** が文頭にくる場合。② **niht** 及びその他の否定詞が動詞の前に立つ時、**en** は多く脱落する。〕